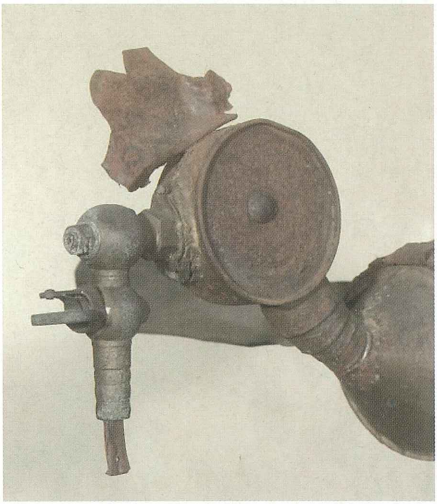
昭和二十一年製樽神輿



［指定年月日］平成一七年三月二三日
［種　　別］有形民俗文化財（信仰）
［名　　称］昭和二十一年製樽神輿
［点　　数］一基
［所 有 者 等］杉並区教育委員会
［所 在 地 等］大宮一―二〇―八（郷土博物館内）

昭和二十一年製樽神輿

昭和二一年（一九四六）という戦争直後のモノのない時代に、苦しい時代であったにもかかわらず、沓掛・清水地区の人々の、井草八幡宮の祭礼の際に神輿を担ぎたいという篤い気持ちから生まれた手作りの樽神輿である。

この樽神輿は、廃材や身の回りの素材を工夫・活用して作ったもので、その特徴は屋根の上の鳳凰部に著しい。鳳凰の胴体は空き缶、首部分は漏斗、頭は水道のメーター、嘴部はガスの元栓で作られている。他の金属部分も空き缶などを伸ばして切ったり打ち抜いたりして作ったもので、胴体の樽や縄、台輪の木製部分も廃材などのあり合せの材料で作られている。神輿の素材はこのような廃物であるが、その形式は屋根の中央に鳳凰を据え、屋根の四方の端には蕨手を付け、台輪の上、樽製の胴の四方（前後左右）には鳥居を配している。また幅、奥行き、高さの比率も宮大工が造る本格的な子ども神輿のそれとほぼ一致しており、四つ棟造りの江戸神輿の形態をきちんと踏まえている。木材の使用についても、板の反りが出ぬよう表裏を使い分け、材料の性質にあわせて適所に使う工夫があり、担ぎ棒には強度があり過重負担に強い心持ち材を選ぶなどの配慮がされている。こうしたことから、この樽神輿の作製には宮大工の知識を持つ地元の大工が関わっていたと考えられる。

戦後、突然神輿を担ぐようになった理由は明確ではないが、戦時中の暗い時代から戦争が終わり、その暗い気持ちを吹き飛ばしたかったからだという古老もいる。この樽神輿は、この年の井草八幡宮の例大祭で担がれ、町内を巡り、井草八幡宮まで渡御したという。大きさは子ども神輿であるが、担いだのは青年や大人たちであった。

本神輿は、戦争直後のモノのない時代を反映していると同時に、そうした時代であるからこそ、自らの力で戦後の苦しい状況を乗り越えるために地域の人々が力を合わせ、持てる技術を駆使し、努力と工夫の限りを尽くして、祭を盛り上げてゆこうとする意気込みの見て取れる貴重な資料である。

【文化財所在地】